

宗學研究方途の反省

余 語 翠 巖

宗學の研究方法、宗學の學問性等に就いての反省は一應の成果を得た上に於て爲さるべきであり、研究途上にある間に爲す事は無意味であるとよく云はれる。けれ共最近種々の角度より爲される宗學研究に對し種々の批判を見る時、一體これ等の批判が如何云ふ立場から爲されてゐるのか、非難する場合、如何なる立場を非難するのであるか等の問題に就いて明確でない點があり、これ等の點に就いて考を整理する上に於て研究方途に就いて反省することは許されてもよいと思ふ。

宗敎研究に關する學問的方法に就いて考を進めやう。凡ての學がそのモデルとする科學的方法による一つに宗敎學を考へることが出来る。宗敎學に於ては歴史の中か

ら宗敎的と云はれる諸々の現象を集め、之に統一的な形を與へる。けれ共、錯雜せる歴史現象の中から宗敎的なものを選び出す標準となるべき「宗敎的なもの」に就いての概念は、宗敎學自體からは得られない。「宗敎的なもの」と云ふ概念規定に關しては、宗敎學自身にとつて他の方法の援用なき限り難透のアポリヤとなる。歴史的なものの中から之を得んとすることは結局循環に墮する外はない。故に宗敎學にとつて、この概念規定は「定まれるもの」と考へ、之より出發する。自ら科學的方法に依ると主張する限り、その基本概念の再吟味を受けることは止むを得ぬ。如何に外廓的宗敎行動の叙述に精細を極めるとも、その窮極の根據は依然として模糊たる中に漂つて

ゐる。

「宗教的なもの」を明にするものに哲學的方法を考へることが出来る。三つの基本的價值、眞善美を超えて、それ等の根柢となる絶對的價值意識として「聖」の概念を提出し、又は主體の客體に對する「絶對歸依の感情」を示す。内容なき概念とは云へ、正しく歴史的現象を裏付けんとする基本概念の規定である。けれ共、かくの如き基準に照されたる現實の宗教の間に於て價值の上下を論ずることが出来なくなると云ふ批判が之に向けられる。

又宗教研究の種々の方法、個人心理學的方法、民族心理學的方法、社會科學的方法其他の方法が、夫々の角度から宗教現象を明にせんと試みてゐる。其の研究方法が異なるに従つて、取扱ひが異なることは當然であるが、それが科學的方法に屬する限り、宗教に關する基準概念に就いて何等の寄與も爲し得ず、更に科學的方法に依らず現實的經驗的内容を顧慮せぬ方法に立つ限り、具體的表

現に就いては何等の力も有たない。宗教の取り扱ひに關する科學的方法と哲學的方法は心理主義と論理主義の對立である。各々の方法自體には夫々の缺點を有つにせよ其等の方法に依つて解明せられる宗教の學問的理解に何を期待すべきであらうか。宗教の學問的取扱ひに就いては莫大な遺産が残されて居り、もつと綿密な叙述を必要とするかも知れないが、今は學問的理解と云ふ項目の下に一括すれば當面の目途に添ふことが出来る。

茲で宗教に對する自己の立場を反省すべきであらうと思ふ。一つの宗教を自己の宗教として生きることに、宗教の知的理解との間には大きな隔りがある。この主張には多くの反對が豫想される。或は、宗教を信仰せんとすることゝ、その學問的理解を別箇のものとして考へる態度自身不可解のものであり、兩者はそんな無關係なものではないと云ふ考へ方、或は、一つの宗教を信仰せぬものにとつてその宗教は無に等しい、かくの如き意味に於てそ

の知的理解は結局正しいものとは考へられないと云ふ如きである。けれ共、かつて佛教復興の聲高き時、有識階級の多くが佛教乃至は宗教に對して取つた態度は、一部の例外を有つの外趣味的な範圍を出てゐない。之は所謂指導原理を確立せんとして、佛教の有つ思想に對する一應の知的反省に過ぎぬことを示すものである。信仰せぬものにとつて宗教は無に等しくその理解は正しくないと言ふ主張は正しいであらうが、右の事實は何等かの意味に於て知的理解の可能性を示すものであり、之が信仰の宗教と相對するものであることを示してゐる。宗教を信仰することは知的理解を全く度外視することではなく、兩者併行的であると云ふ先の反對主張の正しさを認容することとしても、尙且兩者或る意味に於て對立的であることも可能である。さて宗教に對する自己の立場を考へるに、知的理解の對象として宗教を考へてゐるか、又は宗教に包まれやうとしてゐるか、二途を考へるのである。今宗

教を信仰せんとする後者の立場に立つて考を進めやう。一つの宗教を自己の信仰として行くことは事實容易ではない。アウグスチヌスが嘆じた如く、「無學なあの人が起上つて天國をつかみ取つたのだ。然るに學問した私共は、見よ此處に斯く肉と血とをもつて輾轉するのみである。」と云へることを痛切に感ずることが多い。かくの如く信仰せんとする力に押されて進む立場に立つて宗教の學問的理解に期待するものを考へて見やう。

學問的立場に立つては文化現象として宗教一般を取扱ふ。「宗教とは何か」と云ふことに就いての限定に關しては頗る多様であり決定に迷ふが、萬人に諒解される「宗教」の領域があると思ふ。明確に認識されぬまでもそれに就いての縁暈の如きものを感ずることが出來やう。之れによつて宗教學が難透のアポリヤを超えることが出来る。かくの如き精神の領域、又は發現形式等に就いて純粹に知的立場から所謂學問的反省を加へる。知的立場に

於ける反省と云ふことに就いて論を進めるならば、まことに廣大な論とならう。今茲に結論的に知性に對する考へを援用するならば、知性とは動く實在を動かぬ相に於て見るものである。無限に廣がつてゐる漠たる緣暈の一つの中心に過ぎない。所謂非決定性の發展形相である。

種々に之を云ひ得るのであるが、要するに動くものを動いてゐるまゝに見ないのが知性である。動いてゐるものゝ生々たる實感精彩は悉く捨象される。實在の深みへ入る尊い相からその多くを除いた後に残るのが知性である。實在そのものゝ相の後追ひをするのが知性である。

生々たる實相には一步も立ち入れぬのは知性の宿命である。學問的反省は純粹に知性の上に立つ。宗教は知性の領域に於ける事柄ではない。宗教の有つ形而上學的思想體系、又は宗教行爲等は諸他の文化現象と共に、一つの文化形體として知性の把握し得る領域に屬するものであるが、宗教自體はかくの如き領域を離れ知性の埒外に立

つものである。けれ共所謂宗教的現象は知性の反省の對象となり得ることが考へられる。或は宗教を信仰せぬものにとつて宗教は無に等しいと云ふ主張を考慮に入れるとしても前述の如き宗教的現象の學問的反省理解は可能である。かくの如く宗教的現象の思想的、文化史的、乃至は科學的取扱ひは信仰とは全く無關係に爲され得る。

無關係に爲されると云ふことは、學問的理解は信仰と無關係であると云ふことも出来る。かくて宗教を信仰せんとして進むものにとつて、純粹知性的立場に立つた宗教の學問的理解から與へられるものは無である。或は、種々の宗教的現象を除いて宗教自體とは一體何か、空虚なる概念の遊戯に過ぎぬと考へる。之は再應の考慮を必要とする。私達の宗教の學問的理解に求めやうとしたのはかゝる無關係な傍觀的態度ではなかつたのである。かゝる立場を考へずに、宗教的現象が學問的方法の對象として一つの學問の領域を形造つてゐることは夫れ自身別箇

の價值を有つものであり、今此の事に就いて批判を試みやうとするものではない。先に規定した私達の立場に連關して之を考へるのである。

茲に到つて此の問題は、信仰と研究の問題に觸れて來る。けれど、今この事に關して解明せんと企圖するものではない。方法論反省の一面として考察して見たい。研究とは一體何んであらうか。第一にそれは狭い意味に於ける體驗ではない。第二にそれは最も廣い意味に於て何等かの學問性を有つものでなければならぬ。經驗的知識、體驗的内容、歴史的事實等に關して、一つの統一的形體を有つた知識體系を形造ることである。法則的な價値を有つにせよ、個別的な價値を有つにせよ。斷片的でなく統一的體系的なものを形造らうとすることが研究と考へられる。信仰は體驗の事柄である。信仰に就いては種々の考へがあり、一律に規定することは困難であるがそれが體驗の事柄であると云ふことは出来る。流れて行

く體驗の事實を知性が反省の形の上に於て眺めて行くと云ふ意味に於て、研究が根柢的に生活の奥底を指導することは出来ない。けれ共、具體的な場合を考へるに、一つの宗教には特異なる思想體系世界觀人生觀の體系を有つて居り、之がドグマとして立つてゐる。信仰を體驗の事柄と規定して、之とドグマとの關係は如何に考へるべきか。この事に就いてアウグスティヌスの懺悔録序章の語を想起する。「私が爾を呼ぶと爾を讚美すると何れが先なるか。又は爾を知ると爾を呼ぶと何れが先なるか。之を知り又語らせ給へ。されど誰か爾を知らずして爾を呼ぶであらう。まことに爾を知らずして爾ならぬ他の者を爾に代へて呼ぶことも出来るのだ。或は爾はむしろ知られん爲に呼ばれ給ふのか、いかで人とは己れ信ぜざるその者を呼ぶだらう。又はいかで宣傳へられずに信じやう。主を求むる者は之を讚美するであらう。又探す者は之を見出し、見出す者は讚美するであらう。されば主よ

私は爾を呼びつゝ爾を探すのであり、爾を信じつゝ爾を呼ぶのである。爾は私共に宣傳へられたのだ。主よ私の信仰爾を呼ぶのである。爾の御子のかしこき受肉と、爾を宣傳へしその人々の奉仕とに由つて、爾が私に與へ、又私に靈感せしめ給ふその信仰を以てである。」こゝに提出されそして解決されてゐる問題は、今の私達に幾分のヒントを與へるものであると思ふ。ハルナツクはこの章を録中の諸高峰の一つに數へてゐる。この中に述べてゐる「信仰」は直ぐ前に述べてある *Thou madest us for Thyself* を指すものと思はれる。「神に向つて造られたる心を指導するものは、ドグマを宣傳へることであると云ふ考へ方であり。知り而して信ずと云ふ主張である。かくの如く考へて來ると、中世を通じて行はれた知識と信仰の論争を想起する。こゝに一貫して考へられるのはこの場合知識とか研究とか云はれてゐる事柄の内容が先に考へて來た學問的研究とは可成り異つた内容を有つてゐ

ることである。信仰と對立したる研究ではなく、信仰に包まれる研究の意味である。先に規定した二つの立場の一つに一致するのである。經驗的事實に於て信仰せらるべき宗教は歴史的宗教である。歴史的なものゝ必然性を證明せんとすることは不可能の様に思はれる。歴史的世界、經驗的世界が一つの現象的、假現的、一時的なものであると云ふことは逃れ得ぬ。けれ共、歴史的必然はこの唯一つのこの世界に住む者として課せられたる道である。歴史的なものが必然の力を有つて迫つて來る。アウグスチヌスが宗教へ導かれる爲にドグマの歴史的報道を重視したことはまことに意味深く思はれる。まことに歴史的事實は個別的な價值を有つものではあるが、その幾度か歩みけん道を自己のいのちとして歩むことに尊いのちの意識を有ち得ることは奇蹟の如き感を與へる。信仰に包まれやうとする者の取る道は、純粹に批判的立場に立つものでなく、信じやうとする力に押し進められてド

グマを如何に理解せんかの努力である。宗教的特徴を有つドグマの内容と現實の地上的文化の秩序との間を如何にして理解せんかの努力である。かくの如き方途は既に色付けられてゐる。この意味に於て學問的理解に立つものより眞理に不忠實であるとの批判も考へられやう。けれども、學問的知的領域に於ける確さのみに信を置かうとするのは夢である。迷妄である。學問と信仰の問題が既に云ひ古された問題であり、範疇の異なるものゝ間の無駄な論であるとして、この問題を顧みぬ事が多い。けれども、無關係だとして放置出来る問題であらうか。文化體系の中に於ける事柄が無關係である筈はなく、何等かの意味に於て連關を有つてゐる筈である。連關を有ちながらも無關係と云はれるのは如何なる意味か、等の問題は云ひ古されたにも不拘明確になつてゐないのではないかと思はれる。思想史に於ける種々の試みによつて明になつてゐるやうに思はれるにも不拘、宗學等に對する態度

には、この點に就いて菽麥を辨せざる感が深い。信仰が學問を超えるならば如何なる意味に於てであるかが知性によつて示されねばならぬ。知性は知性によつて自らの限界を規定されねばならない。

今、信仰と無關係に爲される學問的理解の方途と、信仰せんとしてドグマを理解せんとする方途とを考へた。かくの如き二方途を宗學とを連關して考へを進めやう。第一に、純粹に學問的理解に立つて進まふとする者の方途は所謂體系的方法である。純粹に批判的立場に立つものである。この立場にあつては批判的立場の有つ思想體系が先に構成せられてゐることが多い。具體的な内容はないとしても、學問的方法による洗禮を受けた體系的な形の中へ宗學の有つ思想を當てはめる行き方である。體系的な形を有たぬものを體系的に理解して初めて分つたものとする所謂近代的方法である。眼藏參究の場合に、ある人々は「眼藏によつて眼藏を見よ」と主張する。けれ

ども、これは容易ではない。先入主を除いて純粹に眼藏に參することは困難である。現今所謂學問的訓練を受けた者は正しく近代的方法の洗禮を受けてゐる。體系的理解、知性的理解を尊重する傾向が強い。かくの如き一つの傾向を有つたものとして今立つてゐることは逃れられぬと思ふ。祖師方の、佛教の老莊的理解の跡のあること、それは佛教が老莊を許容したとも考へられやうが、佛教の理解に先立つて老莊のものゝ考へ方があつたと考へる方が素直のやうに思へる。之と同一徹に立つものと考へることが出来る。こう云ふ云ひ方は甚だ不得要領に見える。ものゝ分ることは凡て體系的である、少くも知的理解は體系的理解を意味する。特に體系的理解を現代の特色と考へるに當らぬとも云へる。けれども、言葉のそれ程嚴密な規定の外に成立してゐる事實を見ることが出来る。而して「體驗を一度反省の上に見直さなくてはならぬ。けれどもその哲學的取扱ひに就いては考慮を要す

る。」と云はれる。この事は正に體系的理解を意味し、そしてこの事が學問的であり研究であると考へてゐる。けれども純粹反省の立場に立つて體驗的事實として述べられてあること、乃至は宗教的思想に就いての文化史的、哲學的反省による理解に就いても、考慮を要すると云ふが如きは首尾一貫せぬものがある様にも見える。「宗教的經驗の事實を反省の上に見直す」ことが如何なる意味を有つか、又之を哲學的、文化史的な學問的取扱ひが何故考慮を要する問題であるのか。前者は學問的妥當性を求めんとする立場からの言であり、後者は信仰的立場を守らんとするものゝ立場である。要するに批判的立場に立つ體系的方法が夫れ独自の價值を有ち、如何に學問的明確を有つとは云へ、信仰に對し何等指導力を有たぬことは幾度か考へて來た如くである。

さて第二の方法とは如何なるものか。宗學に對し古來踏み馴らされた所謂訓詁的と考へられる道である。信仰

に生きやうとしドグマの歴史的報道に導かれやうとする
唯一の道である。けれ共、訓詁的方法を考へる場合に依
然として知的理解が問題となる。その一側面は一系列の宗
學の思想體系の觀念の中に鑄直してそれを理解して行く
のである。同じ類に屬する多くの言葉があり、それ等相
互 言葉換へに過ぎぬものもある。自由な尊い境地の説
明の爲に見出された言葉が言葉だけとして残つてゐる。

その言葉相互の交換だけでは何の寄與する所もない。こ
う云ふ一面を考へる時に、訓詁的と云はれる方途に就い
て更に深く考へねばならない。一系列の觀念體系を有つ點
に於て、體系的理解と考へたものと質的な差異を見るこ
とは出来ない。この訓詁的方法に従ふのも知的理解と云
ふ立場の外に如何なる立場にも立ち得ぬものであると思
ふ。知解の徒、文字算砂の輩として排される立場である。
訓詁的な方法が傳統的方法であり正しく宗學を理會する
やり方であると考へ、所謂近代の學問的形を取る方法を

斥けて淺薄であり正しく祖道を理解する道でないとする
ことは何等積極的理由を有たない。共に知性の面に於け
る論に過ぎない。こゝに別の方途を考へねばならぬ。

第二の信仰に包まれやうとする立場に立つ時、知的理
解の外にも進む行き方があると考へるならば、こゝに宗
教自體に關する異つた考察が要求される。研究の二途と
して異つた態度を考へて來たが、その對象は等しく歴史
的形象を有つた宗教的思想でありドグマである。或る宗
教に於てはその宗教の有つ形而上學的思想、又は箇々の
信仰箇條によつて導かれる宗教生活を有つ。けれ共、そ
れ等がどれほどの妥當性を有つものか。少くもそれ等が
何等かの形を有ち従つて主張を有つならば、それには必
ず相對立するものゝ成立の可能を許すのである。事實、
成立諸宗教の箇々の主張を考へるに、何故その宗教の有
つ主張だけが正しく、他の宗教の主張が正しくないのか
と云ふ根據は少しも見出せない。然し乍ら其れ等の諸宗

教が依然として力を有つてゐることは何を意味するか。それは宗教的力が宗教の有つ思想の中にはないことを示すものである。茲に先に残された宗教自體の問題を想起する。宗教の眞實の世界は何處にあるのか。宗教は主義の問題ではない。更に深い生命力の肯定たるべきものである。窮極的意志の立場に立つものである。行の立場が幾度か宗教の本來の面目と主張せられることはまことに當然である。けれ共知性を以て知性の限界を知らしめる意味に於ても一應の考察を許して頂きたい。

三乘十二分教が悉く月を指す指であると云はれ、巴稜和尚の所謂「鴨寒入水、雞寒上樹」と云ふ如く考へられることは教の形が決定的重要性を有たぬことに關する暗示を與へる。この事に關し卑近な例に就て考へて見る。身體髮膚は之を父母に受けたものであり、之を毀傷せざるが孝の始なりと教へられる。この教の中には種々のものが考へられる。種々の觀點から講說せられ論議せられる。

一側面に立つて考へるならば、第一に人間の物質的方面と精神的方面との一致である。經濟と道德との一致の問題が論議せられる。二者は一體如何にして結びつき得るか。この教を凡百の講說にもまして生かす原理は何か。之を一の直覺と考へて見たい。今受けてゐるこの生命の有難さが深き感情と共に首肯出来る心を直覺する時、凡ゆる論議を超えて尊さを感じる。孝は報恩—むくひ—よりもつと深い處に根ざすべきであり、さうでない限りこゝろ云ふ道德意識の嚴肅さを理解出来ぬと思ふ。かくの如き直覺が所謂緣暈として知性を取りまいてゐる。かゝる直覺が知性の到り得ぬ世界であることに就いては種々の論議がある。之は重要な哲學的問題として論議されねばならない。今は當面の問題として論議するにはあまりに大きい。只こゝでは人間の根本的な力を知性が形をととのへるに過ぎないと云ふ意見に與することだけ申述べて置きたい。鴨寒入水雞寒上樹の語は教學の有つ形而上學

的色彩乃至は種々な教が恐らく外の形をも取り得たであらうと云ふ理解を示すものと思はれる。性格、時代の差異の制約による教の内容が絶対性を有つのではないと思はれる。この語が祖意と教意との同別の間に對する道取であることを考へて、こんな風に理解するのは甚だしき冒瀆であるのかも知れない。訓詁的方法も言葉の置き換へでなく自分の生活に於ける眞實を以て一つ一つ承當して行くのが本來の行き方であつたと思はれる。教の相が絶対性を有たぬことは毫もその價值を減ずるものではない。人は教が窮極の到達點でなく、教の表現する世界へと向つてゐるからである。教が佛界の調度となる世界を志してゐるからである。

行の立場と云ふは廣い意味でこの直覺的なものをも考へて見たい。知性の立場に立つ限りドグマが指月の指であること、理解も困難なわけはなからうか。凡そ生きてゐるものは理性、言葉の外である。かくの如くして知性

の立場をいくら進めても行の立場へ到達することは出来ぬ。かくの如く知解の到達出来ぬ世界が宗教の眞の世界と思はれる。種々の宗教の現象はその表波に過ぎぬ。宗教の眞髓を茲に求める外にないことを知るならば知解を斥けられた祖師の心を理解することが出来る。回心は意志の回心である。死者が死後昇天すること、みたまが何處に成立つかと云ふこと等が明日太陽が昇ると云ふ確信よりも尙一層の確さを以て信ずることが出来るやうになつた時でさへも宗教の眞髓に程遠きを思ふとアウグスチヌスが告白する。意志の回心は知解の世界ではない。かくの如く考へて來ると古い型と云はれる訓詁的方法も多分に知解の一面を有つてゐる。信仰せんとする立場に取つて研究方途を體系的方法と訓詁的方法に分けたことも無意味であつた。凡て知的領域の問題である。故にかくの如き研究に與らずして、宗教の眞の世界に生活出來た人々、無學ながら立ち上つて天國を取得した人々の

事例を多く歴史の中に示されてゐる。宗教は主義の問題
イデオロギーの問題を超える。

の間に於ける抗辯は自らの領域の忠實な維持が解決す
る。

従來體系的方法に立つ研究成果に就いて訓詁的立場に
立つと思はれる方面からの非難を聞く。學問的取扱ひが
眞に宗教の生命を明にする所以でないと云ふのが積極的
理由である。けれ共、所謂新しい立場も古い立場も共に
知解の立場であることを思へば、かくの如き非難も當を
得てゐないと思はれる。面を同じくするものゝ間の相互
の排撃は無意味である。一つのものを明さうとする努力
の同じ型である。一方が所謂西洋的であり外來的である
所以を以て排撃される理由を有たない。然し乍ら、眞實
の宗教の世界が行の世界にあるとしても尙研究の對象は
残されてゐる。學問的研究は毫末も非難せらるべき理由
を有たぬ。この區分が不明確なる時種々の纏れが生じる。
學問的研究が宗教生活に與へる所、無であるとして斥け
る爲には論を以て抗辯すべきではない。面を異にするも

迂遠な道を通つて到達した點はまことに陳腐な云ひ古
された結論に過ぎない。何か新しいことを見出さうと
したのでなく、種々な論證を聞いて整理せんと考へたこ
とであつた。學問は學問の領域を守る。宗教は「志のい
たること」「意志のまこと」によつて求められる。こう云
ふ風に考へる時に、無用の論がなくなるのではないかと
思はれる。(完)